

共同研究「万葉集の成立基盤としてのヤマトの信仰的世界観 —二上山地域を視座として—」について

大石 泰夫

序

本共同研究は「万葉集の成立基盤としてのヤマト¹⁾の信仰的世界観」を、万葉集が成立した時代の伝承を出発点に、多角的な方法で総合的に明らかにしようというものである。特に、地域的にはヤマトの西の境にあたる二上山とその周辺地域を重点的に調査し、万葉集時代の大和朝廷が祭祀したと伝えられるヤマト全体に分布する神社の信仰に目を配りながら、調査研究を展開した。

大和朝廷がヤマトの信仰的世界観をもとに祭祀を行ったことが崇神紀の記述で知られるが、二上山周辺地域では大坂の神が疫病侵入を防ぐために祀られていた。この地がヤマトの西の境として祭祀されていたことを示す顕著な伝承である。万葉集は大津皇子が二上山に移葬されたことを伝え、この他にもこの地域は多くの古典籍に記述がみられる。また、今日には「獄のぼり」「練供養」「オンダ」といった注目すべき民俗行事が伝承され、発掘された考古遺物にも注目されるものが多い。本共同研究は、こうしたことを総合的に考究することを中心に据えて、ヤマト全体の信仰的世界観を明らかにしようとするものである。

本章においては、本共同研究を展開するうえに共有した視座と、実際に展開した調査研究の概略を述べておくことにする。

1. 民俗伝承の重層性

まず、どういう視点で総合化するのかということについて、明確にしておく必要がある。「万葉集の成立基盤としてのヤマトの信仰的な世界観」といっても、それは奈良時代以前のものである。一方、確認できる民俗伝承は現在のものであり、それを単純には結びつけられないということがある。民俗伝承を考究することは、「日本人のエトノス」を明らかにすることであるという立場がある。その立場から現在の民俗伝承を、ヤマトの風土に普遍的に存在するものと理解する方法もある。しかし、民俗文化はそんなに単純ではない。伊藤幹治はいう。

民俗文化はより大きなシステムである民族文化の部分文化をなしている。民族文化とは、民族国家が形成された近代以降の「ネーションとしての民族」の文化のことであり、その部分文化は、ネーションが形成される近代以前に形成された「エトノスとしての民族」が伝承してきた民俗文化と、ネーションとしての民族が新たに創出した共通文化としての民俗文化からなる。現代社会では、ネーションとしての民族が創出した民俗文化と、そこに組み込まれたエトノスとしての民族が存続させてきた民俗文化という、新旧二つの民俗文化が複雑にもつれ合いながら共存している²⁾。

いかにも「近代」を重視した人類学者らしい視点である。近代以前の民俗文化を「エトノスとしての民族」が伝承してきた民俗文化」として「ネーションとしての民族が新たに創出した共通文化としての民俗文化」と対比させて論じており、筆者からみれば近代以前がすべてエトノスとしての民族

が伝承してきた民俗文化であるとは思えないが、この質の異なる民俗文化のあり方を認めてそれが「複雑にもつれ合いながら共存している」という視座には首肯できる。つまり、現在の民俗には、そうした「時間的重層性」が存在しているのである。それを様々な周辺科学の成果を取り込みつつ、解きほぐしていくわけだが、そのすべてを時間的な推移として説明することも困難である。それは伊藤が述べた二つのあり方ともかかわって、もう一つ重層性があるからである。それは「空間的重層性」ということである。

大和朝廷は先に紹介した崇神紀の伝承以外にも、ヤマトに明確な信仰の世界観を想定していたことがうかがえるものがある。『延喜式』の「神名帳」「祝詞」には、御県神社と山口神社と水分神社が集中的にヤマトに伝わる。「神名帳」には、他の国にほとんどこの名称を持った神社が存在しない。また、祈年祭・月次祭（六月・十二月）の祝詞には、それらの神社の祭祀が伝わる。このことから、これらの神社の祭祀が大和朝廷に深く関わり、強く信仰されていたことが知られる。こうした祭祀を飛鳥・藤原京時代に成立したものと考え、万葉集の風土的な成立基盤とみることができるのである*3。祝詞からうかがえるこれらの神社に祀られた神の信仰の性格を端的に整理すると、

- ・御県神…御県で産出する「甘菜・辛菜」の農作物（採取物）を宮中で祀る。
- ・山口神…朝廷施設への建材供給と諸国安定を祈念。
- ・水分神…稲の豊かな稔りを祈念。

となる。また、鎮座地の分布を見ると、御県神社と山口神社は同心円状に分布し、水分神社はヤマトの重要な水系の水源になる山岳地帯に祀られている。これらのことは明らかに大和朝廷の信仰的世界観に基づいた祭祀であることを示している。しかし、これは大和朝廷からみた信仰で、「遠隔地の信仰」といえるもので、その神が祀られている地域の信仰はそれとは異なるものと考えられる。柳田国男は「重出立証法」や「方言圏論」に象徴されるように風土地域差を重視しなかったが、その後の民俗学・人類学や地理学の研究には、地域差を前提とした村落空間の世界観の研究成果に蓄積がある*4。そうした「地域の空間からみた祭祀」と「遠隔地からみた祭祀」とでは、その信仰的な性格が異なると思量されるのである。実際、伊藤高雄は葛城水分神社の祭祀を調査して次のように述べる。

現在の祭りのありかたからは、葛城水分神社の祭りには、水の分配を掌るといふ水分神ゆえの特色はとりたててみあたらないといえるだろう。（中略）葛城水分神社の祭りといっても、本質的には頭屋組織の祭りなのであり、関屋のムラの祭りなのである*5。

このようにもう一つ重層性として「空間的重層性」が、民俗伝承には存在しているのである。

さて、二上山についてはその山嶺が二つあるということに大きな特徴があり、古代文献にもしばしば記される筑波山（茨城県）をはじめ、同じ山容を持つ「フタカミヤマ」が日本全国には点在する。また、本共同研究を進めるうちに二上山周辺には納骨信仰が濃厚であることが明らかになったが、納骨信仰をもつ山が近畿圏には高野山（和歌山県）をはじめいくつか伝わる。こうした同じ山容の山、同様の信仰をもつ山に対しては、地域性を越えて同じ信仰が生まれるのか、また地域性が優先されるのかという問題もある。もし、そこに共通性があれば、それは日本人のエトノスとしての発想が反映されていることになる。こうしたものも重層性を捉えるうえで必要な視点である。

こうした認識に立って、古典籍と民俗伝承の調査結果を中心的な分析の対象としながら、それを歴史的な展開として読み解くのではなく伝承の重層性として捉え、それぞれのテーマにしたがって論じようとしたものが本共同研究である。

2. 調査と研究の実際

本共同研究の具体的な展開は、万葉古代学研究所における研究会・打ち合わせ（東洋大学においても2回）、祭りの時期を中心にしたフィールドワーク、奈良を中心に展開される研究活動に対する調査と参加の三つに大別される。その前提として、当初共同研究者をそれぞれの専門にあわせて次の三つのグループに分けて協議を進めながら調査研究活動を展開した。

- ①ヤマトの西の境としての「古道の伝承と文化」
- ②「山に対する里の信仰」という視点からの二上山信仰
- ③二上山と仏教文化・仏教信仰

研究会・打ち合わせは、それぞれの調査研究成果の発表と調査研究計画のすり合わせに加え、日野西真定氏（仏教民俗学）、森公章氏（日本古代史）を招いて講演して頂いた。

フィールドワークは二上山周辺地域を基点にして、まずは嶽のぼり・練供養・当麻山口神社のオンダの調査、古道とその伝承の確認から始まった。嶽のぼりについては、②のグループを中心にしてヤマト全体に伝わる嶽のぼりの調査を行った。加えて、二上山山麓の寺院には納骨信仰が伝わるので、これと嶽のぼりの関係性を考究するために③のグループを中心に、高野山（和歌山県）・朝熊岳（三重県）・妙法山（和歌山県）の調査を行った。練供養については、他の同様の行事及び練供養の起源として伝承される中将姫の伝説調査を③のグループを中心に、遠野市光明寺・江戸川区善通寺など広範囲な調査を行った。オンダについては、同じ山口神社で嶽のぼりの民俗も伝わる吉野山口神社のオンダを調査したほか、同じ二上山山麓の加守神社・御前原立命神社のオンダの調査を行った。古道については①のグループを中心に、二上山周辺地域の古道の実地調査に加え、そこに伝わる伝説などを地誌類から網羅的に押さえ、その実地確認を行った。その他にはヤマト全体の信仰の世界観を研究するために、都祁水分神社の祭礼などの実地調査や山口神社の調査を網羅的に行った。また、二上山の二つの山嶺をもつという性格からの発想を考究するために、高千穂（宮崎県）・二上山（富山県）などの調査を行った。

奈良を中心に展開される研究活動の調査と参加については、二上山周辺地域を中心とした畿内の博物館・資料館の参観、これらの施設の講演会へ参加するとともに、各博物館・資料館の学芸員に調査協力をいただいた。特に橿原考古学研究所附属博物館の特別展「山の神と山の仏一山岳信仰の起源をさぐる一」の担当であった大西貴夫主任学芸員に、二上山山麓地域の考古遺物などについて話を伺った。

むすび

かくして展開した共同研究を整理するにあたって、二つの角度からの研究の方向性に分けてまとめることにした。

一つは〈ヤマト全体からみた二上山地域〉ということで、もう一つは〈二上山地域の信仰と伝承〉ということである。前者は二上山周辺地域を押さえつつ、ヤマト全体にとってそこはどのようなところなのかということ論じるという視座の研究である。後者は二上山地域の信仰と伝承の特質を、ヤマト全体及び日本全国に目を配りながら論じるという視座である。本報告では前者を「第一部ヤマトと二上山地域」、後者を「第二部二上山地域の信仰と伝承」というように編集した。

最後に研究代表として本共同研究の残したいくつかの課題を記しておきたい。

まず、二上山周辺の調査研究については、広域的な調査研究を展開することができ、新しく明らかになったものも多いが、限られた期間ではヤマト全体に対する論究については一部に留まり、あまり大きな成果を上げられなかった。今後の展開を期したい。

また、二上山周辺地域の信仰的世界観を基軸にして、宮都造営地の信仰的世界観を明らかにし、それを同時代の東アジアの宮都造営地と比較することを計画したが、そこまで展開するに至らなかった。近年、大きく進展し、万葉古代学研究所の研究テーマともなっているこうした視点に踏み込めなかったことはまことに残念であるが、今後の課題としたい。

注

- * 1 本共同研究の用いる「ヤマト」は、「大和」「倭」「奈良県」などという表記が負っている限定される範囲から出て、今日の地名表記でいう奈良盆地を中心としてあいまいに「ヤマト」と認識される範囲をいう。
- * 2 伊藤幹治『日本人の人類学的自画像 柳田国男と日本文化論再考』筑摩書房、2006年、235頁。
- * 3 櫻井満「万葉集の成立基盤」(『万葉集の民俗学的研究』(上)、著作集第3巻、おうふう、2000年)。
- * 4 八木康幸「地理学と民俗学」(『民俗村落の空間構造』岩田書院、1998年)に詳しい。
- * 5 伊藤高雄「信仰伝承—分水嶺の神々—」(櫻井満・大石泰夫編『葛城山の祭りと伝承』おうふう、1992年、99頁)。